

令和3年11月12日

# 南の風 423

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

引用を続けます。

そのような視点でスポーツの現場を考えると、やはり選択の機会や失敗する機会が与えられていないように見えます。

少年の試合も、日本は最初から勝つためにやらなければならないことが大人から提示され、非常に制限のかかった中でサッカーをしていると感じます。スペインでは「自分たちが思ったようにやってごらん。これとこれだけ約束しよう」と話してピッチに送りだします。

スポーツ現場のパワハラについても、スペインは法に守られているうえ、他者に対するリスペクトの概念が深いからか、小学生など育成年代の試合でもほとんど見かけません。

日本の場合は、パワハラと認定されるブラックなものよりも、他大勢のグレーゾーンが多いようです。人々の感覚が麻痺しているのか、ベンチからプレーしている子どもを怒るコーチが珍しくない。そうやって萎縮させたら、子どもは自分で考えてプレー選択できません。脳の作業がしづらくなるからです。

移動の機内で観た邦画「フォルトウナの瞳」のなかで「人は朝起きてから夜寝るまで9000回、何かを選択している」というようなセリフがありました。それなのに、サッカーの時間になったら急にその「決断」という本能を指導者から制御されてしまうのはおかしな話です。

日本の風土をすぐに変えるのは難しいでしょう。せめてスポーツの指導現場では、禁止事項を減らし、子どもたちがたくさんの選択肢から自由に選べる環境で認知力を育ててください。

そのようにして、スポーツの現場から教育そのものを変える。そんな動きが出てくれば、日本はあらゆるスポーツで世界上位に食い込める。そう確信しています。

## 野獸的な指導者が消えるスペイン

先ごろ、スペインでも著名なスポーツダイレクター（強化部長）と話した際に、「スペインでベスティア系指導者の居場所がなくなってきてるね」という話になりました。ベスティア（Bestia）は野獸的という意味で、いわゆる吠えるタイプの指導者を指します。延々と指示出しを続け、時にペットボトルをたたきつけたり、審判や相手チームに圧をかける。一昔前までは、情熱的だ、熱血監督などと美化されていました。

それが最近では「人権リテラシーへの意識が低い国に居場所を求めて移動している」と教えてくれました。もちろん、それらの国で活躍している指導者が野獸的だと言いたいわけではありません。このスポーツダイレクターが「これまで知り合った監督のなかで圧倒的なフットボールの知識と理解が深い優秀な監督」と思う人もいます。

でも、その監督を「自分のクラブでは絶対に採らない」と彼が断言するように、フットボール界が求める指導者のプロフィールは急速に変化してきている。これは良い傾向だと感じました。

プロでもそうなので、育成現場はこの傾向がさらに加速しそうです。次号に続けます。